

研究ノート

里山の基礎的研究

— 南那須 —

細 野 英 夫

Satoyama A Study

HOSONO Hideo

目 次

はじめに	6. 南那須町の動物
要約	7. 里山の利用
1. 南那須町の自然状況	8. 稲作農耕文化と里山
1) 位置・地形・地質	9. 里山の再評価と復権
2) 気候	10. 文化・歴史・祭りと行事
3) 河川	1) 歴史
2. 里山の生態系とその保全	2) 指定文化財
3. 里山と人間のかかわり	3) 史跡
1) 里山とは	4) 天然記念物
2) 人々の生活	5) 祭り
4. 里山の植物と植生	6) 民話
1) 植生	おわりに
5. 南那須町の植生	参考文献
南那須町の自然度	

はじめに

秋の収穫が終り、人々の感謝の念を込めた祭りや祖先への祈念が終了し、静かなたたずまいをみせている。

喜連川丘陵地から連なって緩やかな丘陵が南北に伸びている。低地の部分には、同じ方向に荒川の流れが豊かな水源となり、水田や畑地等の耕地が広がっている。その間に集落の家々が点在している。森・水と田畑を守っているいくつもの神社が鎮守様として奉納され、人々の生活はそこに根付いている。

人々が伝統的に維持してきた里山には、自然が息づき、動物と植物が生息し、人間が住みついている。それはマレーシア・ボルネオ島で見た広大な熱帯林を皆伐し、ココヤシの林が限りなく広がり続くという人間が経済的理由だけで自然を完全に利用した現代的風景とは全く異なる美しいと感じる風景である。そして、里山は穀物の収穫だけでなく土地の保全、生態系の維持という多面的な役割を持っている。

里山は丘陵を削り、自然を大きく改変する作業によって作り出された。一旦は生態系を破壊し新しい生態系を作るという営みである。人間が自然に手を加え一体となった景観を作り上げた。人間のエネルギーが結集しているといえよう。効率の良い水の循環、それを利用した多くの耕地と生物たちの営みがある。そこには人間生活の安全性を長期的・効率的に保証し、豊かな文化を築く根源がある。

人間は自然を改変しながら生きていかななくてはならない。田畑も道も自然を作り替えることに変わりはない。私たちが普段目にする風景はみなそうだ。原風景ともいえるものである。それは改変しながらも美しいと感じる風景である。反面、醜悪な風景もある。この違いはどこからくるものなのだろうか。自然と人間の付き合いかたについて里山をもとに考えてみたい。

要約

里山の成り立ちは、人間と自然との関係の成り立ちに等しい。その関係とは自然に対する人間による干渉である。里山はその結果としてできたものであるといえよう。里山の代表的な樹木であるスタジイの堅果はヒトの食べ物として、古代人たちの胃袋を満たしてきた。その結果、スタジイの木は食料をもたらす樹木の一つとして、広く分布することとなった可能性が高いといわれている。

ここでは、栃木県南那須町の自然をもととして、その里山の現状がどのようなものであるかを中心に考えを進めることとした。

内容的には、南那須町の自然状況、里山の生態系、特に、そこに住む植物や動物、また、そこに生きる人々とその生活と文化などについて概略的にみたもので、それぞれについて掘り下げたものとはなっていない。

2003年の秋、ゼミナールの学生とともに南那須町にある少年自然の家に合宿（9月10日～12日、同27日～28日、10月11日～12日の三回）をした。その間に、町教育委員会、町立歴史民族博物館を訪ね資料を集めた。また、建造物・史跡・寺社・天然記念物を幾つか回った。そこで実感できたことは、南那須町の里山は誠に豊かに人間と自然とが共生していることである。

1. 南那須町の自然状況

1) 位置・地形・地質

栃木県那須郡南那須町は栃木県中央部より東によった地域、南那須郡の最南端にあり、標高100～300mの喜連川丘陵のほぼ中央部に位置している。周辺に隣接する町々である喜連川・氏家・高根沢・烏山・小川・芳賀等々に囲まれた丘陵地帯である。南北15.6km、東西9.1km、総面積81.56km²の広さを持っている。

丘陵の基盤は新第三紀中世の塩谷層群と荒川層群で、その上に第四紀洪

積世の川崎層群が不整合に堆積し、さらにローム層が重なっている（下野地学会 1979）。この荒川地層群には貝類や有孔虫などの海生生物化石が含まれている（吉沢、青島 1987）。また、最近全国でも珍しいクジラの化石が発見されている。⁽¹⁾

丘陵地のほぼ中央は八溝県民休養公園となっており、そこには県立南那須少年自然の家・自然丘陵村・森山花水木総合運動公園・那須いなか村オートキャンプ場などが点在し自然豊かである。また、ゴルフ場が10ヶ所ある。

南西部の平坦地には、水田や畑地が広がり、その背後の緑豊かな小高い丘、その山裾に沿って点在する家々、また、丘陵地と平坦地との境に北西から南東に荒川・江川・大川が流れ田畑を潤している。平地林の大半はクヌギ・コナラ等の落葉広葉樹とアカマツの混成する単純な植生となっている。所々にチガヤ・ススキなどが生育する茅場や茶畑・竹藪があり、神社・寺・墓などもある。里山は農業と農民の生活を支える舞台装置を備えている。そこには典型的な日本の里山のイメージそのままの景観がある。

2) 気候

この地は、太平洋型気候のもとにあり、年平均気温12.5℃（月別平均最高気温24.3℃ 8月、同じく最低気温2.1℃ 1月）年降水量1,424mmを示し、比較的温暖な気候の内陸性温帯気候である。下記のデータは、喜連川測候所調べ（栃木県 1977）によるものである。⁽¹⁾

表 調査地付近の気温と降水量（1951～1975）

気候要素		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
気温（℃）	平均	1.4	2.2	5.3	11.5	16.3	20.0	24.1	25.5	21.2	14.9	9.1	3.7	12.9
	最高	7.7	8.6	11.7	17.7	22.4	24.7	28.3	30.1	26.6	20.1	15.1	10.2	18.5
	最低	-5.1	-4.2	-1.0	5.1	10.3	15.3	19.9	20.8	16.7	9.6	3.0	-2.8	7.3
降水量（mm）		41	46	76	106	139	217	191	187	214	129	65	43	1454

（栃木県 1977）

3) 河川

南那須町の河川は那珂川水系1級河川である江川・岩川・荒川・長者川及び利根川水系普通河川である大川・小貝川が、町北西から南東にかけて流れている。



2. 里山の生態系とその保全

里山の生態系においては、自然に対する人間の影響力は非常に大きく、関与の仕方も多様であるため、複雑さの程度は著しいものがある。

私たちの生活は、農作物などを第一に食料として利用するが、それだけでなく、多様な生物を生産材料として、さらに工業材料、燃料さらに医薬品として利用することによって成り立っている。バイオテクノロジーなど技術の発展によって、新しく医薬品や食料品の開発に役に立つ可能性がある。

ここで改めて生態系とは何か考えてみる。生物圏を構成する要因である地球上のすべての生物たちは、単におかれている外的条件である無機的環境要因によって規制されるばかりでなく生物相互の間に共存関係が成り立っている。この生物群集と環境とが一体となっただけでなく、かたちづくりシステムしているものを生態系とよんでいる。ここで生態系について定義してみる。

“生態系とは、あるまとまりのある地域に生活する生物すべてと、その生活空間を満たす無機的環境とが、互いに密接な相互作用によって結びつけられて形づけられているひとつの系”ただし、生態系の便宜的な概念であり、実態としての生態系は“自然”そのものである。⁽²⁾

こうして里山の生態系とそこに住む多様な生き物は、人間社会の生活・経済そして科学を育んでいるのである。後に述べるが、文化的・教育的にもそしてレクリエーション的にも人間にとって有用な価値を持ちその源泉となっているのである。

しかし、これらの人間の活動や開発は、種の減少、絶滅、生態系の破壊・分断を引き起こしている。また、捕獲・採取による個体数の減少、森林の開発、埋め立てによる湖沼、河川、海の破壊、汚濁した排水による生態系の破壊などを引き起こしているのである。里山を初めとして自然環境の保全は危急の課題である。さらに、里山は、奥山地域と都市地域の中間に位置し、国土の4割を占めており、農業などの生産や生活活動と深く関わっ

て成り立っている。また、絶滅危惧種の5割が生息する生物多様性のうえからも保全が必要なのである。

3. 里山と人間のかかわりあい

1) 里山とは

里山とは、里地里山とも呼ばれ、農山村の人家の周辺の人の手が加わった田畑や森林を目指す言葉として用いられている。人と自然が共存してきた結果できたものである。そこには豊かな自然と、人との共存の知恵がいっぱい詰まった宝の山なのである。

里山と人間のかかわりという視点から考えてみると、地球上の生物は、生態系というひとつの環のなかで深く係わり合い、繋がりがあって生きている。里山は二酸化炭素の吸収、気温湿度の調整、土壌の形成、水の涵養などさまざまな働きを基盤をもち、人間という存在にとって欠くことのできない環境をすべて整えている。里山という言葉は、人の手のほとんど入らない奥山に対して、農山村の人家の周辺における人の手が加わった森林を目指す言葉として使われていることが多い。しかし、人間の生産活動との関わりと言う点では、田畑や草原も森林と同様であり、里山を人間の諸活動を含めた里山生態系として捉える必要性が生じてくるといえよう。だが生態系と呼ぶにはきわめて不完全なシステムであり、森林、水田、草地などそこに住む動植物のセットと言ったほうが自然である。以上、里山は人間とそれを取り巻く自然とが相互作用するシステムとして広く捉えることが望ましいといえよう。

人間も生物であり、人間は自然を利用しなければ生きていけない。一方他の生物の多くも人間との関わりあいの中で様々な適応を遂げてきた。今ある生物多様性とは、このような人間と自然との関係の総体的な結果である。里山は人間と自然との関係の総体的な関係とみることができる。自然の健全な物質循環が維持されるような土地利用を行い生物多様性が確保さ

れた自然の保全をすることが基本的な考え方である。

2) 人々の生活

人口13,158人、世帯数3,332戸（平成6年現在）、町総面積81,56km²、森林面積33,66km²（41.3%）農用地（田・畑・採草放牧地）面積25,73km²（31.5%）、その他18,40km²（22.6%）、就労者数6,809人（平成2年現在）うち第一次産業就労者4,810人（比率75.0%）であったが、平成2年には1,598人（23.5%）とほぼ3分の1に減少している。農業が基幹産業である。第二次産業は昭和40年に比較し、平成2年は約4.4倍の2,892（42.5%）となり、昭和50年代より農林業との調和や自然環境保全等を考慮し、町営による中核工業団地の整備を中心に進められている。宇都宮テクノポリス支援地域として、先端技術分野の誘致を進める計画である。第三次産業も約2.4倍の2,319人（34.0%）と伸びを示しているが小規模な家庭経営が多く、ニーズの多様化への対応、後継者不足等が課題である。大型ショッピングプラザを設け、活性化を目指している。

4. 里山の植物と植生

四季をもち、四季とともに生きる文化を育んできた日本には、多くの動物が棲み、さまざまな植物がいきづいている。約9万種の名が知られており、知られていないものを含めると20万～30万になる。約37.8万km²という狭い国土にも関わらず、日本は多様性に富んだ生物相をみせている。

1992年、リオ・デ・ジャネイロで開催された地球サミット開催にあわせて採択された「生物多様性条約」では、遺伝子・種・生態系の3つのレベルでとらえ、それぞれを保全する必要があるとしている。この1年で日本国土の多くの面積の森林が失われており、そのことによって多くの生物は遺伝子・種・生態系とともに絶滅の危機に瀕しているのである。

里山は、薪炭材、肥料としての落ち葉、家畜の飼料としての草、屋根葺

きの材料を得る場所として、多くの利用価値を持っていたが、石油、新建材、化学肥料の出現によって、利用価値が低下し、里山や草原は管理されないまま放置されることになった。

国土の4割を占める里山は、人間と自然のかかわりが作り出した田畑、里山林などの変化に富んだ自然環境である。そこには絶滅危惧種の5割近くが生息する生物多様性の上でも重要な地域である。レッドデータブック・レッドリスト（環境省、平成13年7月）によると、絶滅危惧種—絶滅危惧Ⅰ類およびⅡ類—は、動物で669種、植物1,994種となっている。

1) 植生

南那須町の植生は暖帯落葉樹林～暖帯常緑樹林の移行帯にある。丘陵地はほとんどが二次林でコナラ・アカマツ・スギ・ヒノキなどの林である。その一部はアカマツ林であるが、尾根筋や斜面の大部分はコナラ林でおおわれ、谷筋では小規模なスギ・ヒノキの植林地が分布している。また、荒川・江川等の河川沿いの平地には、シラカシ・アラカシなどのカシ林が分布しているが、宅地・水田や畑地となっている。

林地の天然林と人工林の面積の割合は、2,283ha (70.9%) : 937ha (29.1%)
：アカマツ林 コナラ・ヤマツツジ群落の構成種としてアカマツが混成している。

アカマツ優先林は少年自然の家周辺と丘陵尾根部に広く分布している。

：コナラ林 尾根筋や斜面に広く分布している。かつて薪炭・椎茸ほだ木として維持管理され萌芽更新を繰り返し二次林として成り立っている。

：クヌギ林 コナラ同様かつては薪炭・ほだ木用として利用され、二次林が発達している。少年自然の家周辺に分布しているものは、組成を知る上で重要である。

：カシ林 シラカシ・アラカシ・ウラジロカシ等暖地系の樹木が丘陵

地や河川沿いに広く生息している。ウラジログシ・アカガシの混交林は社寺境内に残っており、貴重な群落となっている。⁽³⁾

5. 南那須町の植生

南那須町内の植物相は明らかにはないが、暖帯落葉樹林～暖帯常緑樹林の移行帯にあることから自立する植物相は豊富なものと考えられる。町内で確認された注目種は下記のとおりである。

- 1) 暖温帯性植物 洋歯類—オニヤブソテツ・コモチシダ・イワヒメワラビ・ベニシダ

カシ林—アラカシ・ウラジログシ・アカガシ

- 2) 冷温帯性植物 木本類—オシダ・ブナ・イヌブナ・ツガ・ハルニレ
草本類—ソバナ・アヅマイチゲ

ブナは局地的分布ながら低標高地の自生地として注目される。

- 3) 好質性植物および水生植物 ハンノキ・イソノキ・クロツバラ・カラコギカエデ・モウセンゴケ・トキシウ・ヤマラッキョウ・カキツバタ・ノハナショウブ・コマツカサススキ・キセルアザミ・カンガレイ・ミズナラ・ミジオオバコ

灌漑用のため池—ジュンサイ・ヒツジグサ・タヌキモ

- 4) モミ林 尾根筋や斜面に二次林として成立した落葉広葉樹と混成する小規模なモミ林が散在している。一部の林床にイヌブナの生育がみられる。

- 5) ハンノキ林 山間部の沢状地や休耕田跡の低温地には小規模ながらハンノキ林がある。特に東郷溜の池畔には生育状況の良いハイノキが広範囲に生育している。

- 6) 希少種 「我が国における保護上重要な植物種の現状（栃木県）の記

載種のうち以下の四種が確認されている。ミズナラ・ミクリ・
トキホコリ・オオヒキヨモギ⁽³⁾

* 南那須町の自然度

自然度は、植生に対する人為の度合いによって、日本の植生を10の類型に区分したもので、長年にわたる人と自然とのかかわり合いのなかで形づくられてきた自然環境の現状をあらわしている。

区分内容 10自然草原 9自然林 8二次林（自然林に近い） 7二次林6植林地 5二次草原（背の高い草原） 4二次草原（背の低い草原）
3農耕地（樹園地） 2農耕地（水田・畑）、緑の多い住宅地 1市街地・造成地

南那須町の自然度は、どの段階に区別されるだろうか。町総面積の41.3%が森林であることから8・7・6であるといえる。また、31.5%が農用地（田・畑・採草放牧地）であることから4・3・2の部分も大きいと言える。

6. 南那須町の動物

南那須町には多様な動物が生息している。

1) 哺乳類 8科15種の生息が確認されている。年々生息環境の悪化により個体数は減少しているが、広く県内に分布している。

特記すべき種として、ニッコウムササビ・ハクビシン・ニホンアナグマ

a 町内全域に分布し、個体数の多いもの

アズマモグラ・ホンドアカネズミ・ホンドハタネズミ

b 町内ほぼ全域に分布するが、ばらつきがあり、個体数はaよりも少ない

ホンシュウヒミズ・ノウサギ・ホンシュウカヤネズミ

- c 人家周辺のみ分布し、個体数も少ない

アブラコウモリ

2) 鳥類 34科111種が認められている。そのうち繁殖または繁殖の可能性のある鳥は62種で55.9%を占める。このことは南那須町が鳥類の繁殖に可能な自然環境が保たれている地域であることを示している。町内に分布しているアカマツやコナラの林には、冬になるとルビタキ・オオタカ・サシバなどが棲みつき繁殖の場となっている。その他 a ハヤブサ b チュウサギ c オシドリ d ハチクマ e ハイタカ f コアジサシ g タゲリ h ヤマセミ

オオタカ、ハヤブサは危急種。その他は希少種

- 3) 爬虫類・両生類 サンショウオ目 1 種 カエル目 9 種 トカゲ目 2 種 ヘビ目 1 種 カメ目 1 種 計 19 種が確認されている。

- a 町内全域に見られ、個体数も多い

爬虫類…ニホントカゲ・カナヘビ・シマヘビ・アオダイショウ

両生類…ニホンアナガエル・ニホンアカガエル・トウキョウダルマガエル

- b 町内全域に見られるが、個体数は a より少ない

爬虫類…ジグムリ

両生類…アズマヒキガエル・ウシガエル

- c 丘陵地帯、山間部を中心に局地的に見られる

爬虫類…ニホンマムシ

両生類…ニホンイモリ・ヤマアカガエル

4) 昆虫類 動物は、ある特定の種は特定の地域にしか生息していないことが多い。また特定の属が特定の地域にしか分布していないという例もある。このような分布の境界線を、多数の例について調べてみると、世界を6つの地域（環北極圏系、旧北区系、朝鮮・ウスリー系、西部支那系、インドシナ系、広域分布熱帯系、日本特産種）に区分けすることができ、これを動物地理区と呼んでいる。

動物地理区の解明区分が進んでいるチョウ類・トンボ類についての南那須町の状況

- a チョウ類 67種うち西部支那系が22種、朝鮮・ウイリー系12種。
- b トンボ類 チョウ類と異なり朝鮮・ウイリー系が17種と多く、次いで日本特産種が15種、西部支那系が9種である。

*注目の生息状況 環境庁では、良好な自然環境を知る目的で、10種の指標昆虫を選定しているが、南那須町では、ムカシヤンマ・ハッチョウトンボ・タガメ・ハルゼミ・オオムラサキ・ゲンジボタルの6種が確認されている。⁽³⁾

7. 里山の利用

里山のような二次林は、的確な管理・利用があつてこそ保全されるのである。自然の質や立地に応じた自然保護ならびに国土の保全・利用のための的確な計画と実行ある法制度が必要である。都市近郊林も含めて、無秩序なゴルフ場の開発やごみ処理場の設置には、的確に規制する法制度の用意が必要である。

都市の巨大化した現代では、「緑」への要望は増大している。里山の持つ「遊山」としての価値は高まっている。里山の自然環境とそこに生きる野生動物を守るには、遊離してしまった里山と人との関係を、再構築する事が必要になる。この課題は大きいものである。いかに、里山の公益的価値が高かろうとも、経済的な実利なしに考えることは困難である。そのためには、里山の持ち主・市民・行政の三者のパートナーシップによる保全・管理システムの形成が必要不可欠な要件であると言えよう。

次に、里山の自然の楽しみ方について箇条書にする。

- 1) 家族や地域社会の人々の団欒やピクニックを楽しむ。－豊かな緑量の森がある－
- 2) 自然環境・昆虫採集－多様な生物が、豊かな生態系を形成している－

- 3) 散策探勝－静かな環境、危険度の比較的低い動物など安全性が高い－
- 4) 野生動物の鑑賞－安全度の高い動物が生息している－
- 5) 野生動物（鳥獣）生息地・避難場所の保全・管理
- 6) キャンプ・飯盒炊飯・オリエンテーリング・フィールドアスレチック
- 7) 維持や管理活動作業（芝刈り・下草狩り・間伐・山道の修復）

また、里山は以下のような活用と効用があると考えられている。

- 1) レクリエーションや自然探勝の場
 - 2) 自然教育・環境教育の場
 - 3) 子供の遊び場・民話の舞台・童話の舞台－ふるさと・虫の声・春の小川・赤トンボ・おぼろ月夜・クリ拾い・ドングリころころなど
 - 4) 多様な環境保全機能
 - a 水源の涵養や洪水防止・土砂保全
 - b 高温化する都市気温の調整
 - c 大気の浄化－CO₂の吸収
- 里山は、その地域の気候条件や土壌条件に適応して成立しているため、一定の抵抗性をもち環境保全機能を持つ。
- 5) 再生産再生可能な持続的利用
 - a 薪炭材・農林材（ほだ木）
 - b 堆肥材・飼料・屋根葺き

8. 稲作農耕文化と里山

世界の文明は、それぞれの地域の生態系－そこに住む生物の多様性の違いに基づいて、それに根ざしたものとして誕生し発展してきた。今より約8,000年以前東南アジアではイネ、西アジアでのコムギ・オオムギ、あるいは多少遅れてアメリカ大陸でのトウモロコシといった植物の栽培による農耕の開始は、自然物を採集する階段から、栽培する階段への変化は、人

間の生活の営みを一変させた。人類文化史上最大の革命であった。結果、世界最古の文明であるメソポタミア・黄河・エジプト・インダスそしてインカなどの文明を築いてきたのである。

日本の文化、特に深層の部分については、中国の雲南に起源を持つとされる照葉樹林文化論（中尾佐助を中心とする京都学派）が一つの説として唱えられている。豊かな照葉樹林が水資源を涵養し、これを灌漑用水として稲を栽培、発展させてきたと言うものである。紀元前4、5世紀ごろ北九州に上陸した稲作は、それだけではなく綿花・茶・柑橘類の栽培ももたらし、さらに養蚕・漆器・竹細工などの産業も興すこととなった。これらは人々の生活にも影響を与え稲作を中心とした農耕文化が誕生した。江戸中期17世紀のころクライマックスに達した照葉樹林文化は亜熱帯的風土を持つ西日本を中心として発展し、徐々に東日本のブナ林帯まで拡大したが、冷温帯というべきブナ林帯では「冷害」という社会現象が発生する事があるのは当然と言えよう。

稲作農耕文化は、農耕ばかりでなく衣食住をはじめとして多くの生活様式にまで移植され照葉樹林文化を築くことになるのである。

明治維新後近代化、工業化の急速な発展は、我が国に高度な現代社会をもたらしたが、宮中での儀礼とされている天皇による田植え・稲刈り、皇后が営む養蚕、東宮妃による山蚕飼育さらに神嘗祭・新嘗祭（現在の勤労感謝の日）、農耕的神道儀礼である地鎮祭など深層文化は稲作農耕文化である照葉樹林文化が根底となっているのである。

日本人は、自然と順応してさまざまな知識、技術、豊かな感性や美意識を培い、多様な文化を形成してきた。これからの世界、自然と共生する社会、ライフスタイルを築くために、これまでに築いてきた稲作農耕文化の持つ知識や技術を学んでいかなければならない。

地域によって生物多様性が異なれば、これに根ざした文化も異なる。多様な生物や文化は地域ごとの固有資産である。今後の地域活性化を成功させるためにも重要な鍵となる。

ここに里山の再評価と復権の必要性の根本があると思われる。自らの生活を再点検し、考え、行動する市民の連帯が、行政や企業の姿勢を転換させ、協力を引き出して、豊かな環境を復権してゆくのである。

9. 里山の再評価

生活水準が上昇し、社会福祉充実が推進されつつある今日、人々の意識は自分自身の健康維持や生きがいの場として自然との接触に求めるようになりつつある。イギリスのBTCVによる田園景観の保全活動はその一つの例である。バードウォッチングや里山などの低山登山などの市民の自然志向は盛んである。自らの生活を再点検し、考え、行動する市民の連帯が、行政や企業の姿勢を転換させ、協力を引き出して、豊かな環境を復元させて行くのである。

里山を再評価し復権のために、里山の重要性について考えてみる。

一つ目に、すでにそこに豊かな“緑”があるということである。いったん緑を奪い去って新たに復元しようとしても、長い年月がかかる。

二つ目は、里山の森はその地域の気候条件や土壌条件に適応して成立し、一定の抵抗力を持っている。台風や洪水、夏の日照りや乾燥などに対する基本的な管理の費用や手数がかからないということである。

三つ目に、里山には大変豊かな生態系が成り立っており、多様な生物が生きていることである。多くの種類の植物・各種の野生動物・落葉を分解する土壌動物や微生物がその環境に適応して多層社会を形成している。人間が心身共に健康的に生きていくためには、里山の生物たちも豊かに生きていけるようにしなければならない。また、もっと知的で文化的な生物にレベルアップするためにも、これらの生物たちと共生できるようにせねばならない。よき協力者として、また未知の情報の提供者としてなくてはならない存在である。現に古来より人間は生物たちより様々な薬品を得ている。

四つ目には、その環境保全機能である。酸素の生産、二酸化炭素の吸収、大気の浄化、高温化する都市気温の調節、保水力、雨水の浄化力、土砂の崩壊の防止など人間生活には不可欠の機能をもつことである。

五つ目には、その環境保全機能である。現在、薪炭材林や農用林としての役割は失われている。クヌギ・コナラ林が、シイタケ栽培用のほだ木や薪炭材に利用されているにすぎない。しかし、森林は再生産と持続可能な利用が可能な資源として、国内自給や燃料の安全保障の役割を果たすものとして、潜在力を秘めている。

六つ目は、レクリエーションや自然観察の場として、環境教育の場としての活用である。

以上のように里山は非常に多面的で複合的な、そして、潜在的な役割を持ち、人間による不用意な汚染や破壊は許されない。適切な保全こそ肝要である。⁽⁴⁾

10. 文化・歴史・祭りと行事

奥山地域と都市地域との中間地点に存在する里山には田畑・水田・林・河川などが広がり、人間と自然とのかかわりが古くから営まれてきた。安全な生活、豊かな実り、森林の生育そこでの獲物の豊富な捕獲を祈る祭りや行事があった。それが神社であり、祭礼であった。多くの祈りがあったと考えられる。そればかりでなく祭礼や行事は年中行事として人々の楽しみの一つであった。

ここ南那須町にも多くの建造物・工芸物・仏像その他が文化財として残されている。また、その周辺には古くから地域の人々に大切にされ、慈しみをうけ、ときにはシンボルとなって存在感を持つ樹木があった。

1) 歴史

南那須町についての最も古い文章記録としては、奈良時代の白布に記さ

れた「熊田郷」である。しかし、遺跡からの調査によると原始の時代より人々の生活が記録されている。中世の時代になると南那須町地域は那須氏一族の影響のもと、その領域を守護され、生活を保ってきた。

また、弓の名手として知られる那須与一の長兄、那須太朗光隆の開基である芳朝寺には、光隆の墓碑と小塙に森田陣屋を構えた大田原氏歴代の墓碑がある。

2) 指定文化財

有形文化財の多くは安楽時・西光寺等に所属している。うち南那須町指定文化財は16件、県指定文化財は14件ある。

3) 史跡では、旧石器時代の大和久遺跡や数々の古墳群、焼き米が出土する長者ヶ平遺跡などが残されている。

4) 天然記念物は、すべて樹木で巨木が多く、樹齢は250年から750年である。

5) 祭り

祭りとは、神に五穀豊穡。健康様々な人々の願いや病気や災害を払ってほしいと祈りを捧げることである。姿は見えないが恩恵をもたらしてくれる有り難い存在として感謝する。祭りは長い間行われ受け継いできたものである。

祭りの形式は地域により様々である。南那須町の祭りについて、その成り立ちや内容を調べてみる。⁽⁵⁾

a 「森田」の獅子舞

南那須町の南東にある「森田」地域では「獅子舞」が行われている。

慶長5年ごろ、当地方に天変地異が相次いだ。領主である大田原増清は、

領民は不安で動揺することを案じ、神の心を鎮め、災害のなくなることを願ひ弁財天を祀って民生の安定、そして五穀豊穡を祈願したのだった。

これが弁財天祭礼の始まりといわれている。獅子舞は祭りのメインとして三頭の獅子のラブロマンスを笛の音に合わせて舞い、その間に「おかめ、ひょっとこ」の面をつけたコミカルな踊りが入ってくる。神と人とが一体になって繰り広げられる愉快的な踊りになっている。

獅子のラブロマンスとはとても興味深い内容である。

例年9月1日に行われる。

b 「熊田」太々神楽（だいだいかぐら）

この祭りは「太々神楽」の由来については、まとまった文献や資料はないらしく、明白とはなっていない。

昔、ある人物が習得した舞を口伝秘法により、一集団にのみに伝えられるのである。

舞は31番あり、笛・太古などによって舞われ、一番々が異なる演技をもち、それぞれに特徴を持っている。素朴さの中にも優雅さがあり、非常に面白みのある舞である。

この「太々神楽」も神々と関係があり、神話の天照大神が天の岩屋に隠れたときの舞を中心としたものだそう。

例年9月1日に行われる

c 「塙」の天祭

この祭りは、松原寺境内で行われる。

この祭りの起源も正確なことはわかっていないが、高野山で修行を修めた僧が「天祭」行事と念仏踊りを伝えたのが始まりだとされている。

3日にわたる風雨順時、五穀豊穡を祈る祭りは日天・月天を中心とした神仏を歓請する一日目、天棚の組み立て。二日目、行人が水垢離をとり、神宮・僧・行人が天棚に登楼して祀る。その後、天棚前の舞台で子供が囃子によって太鼓をたたき、はちまき、浴衣、たすきの若者が踊りを披露する。

細 野 英 夫

三日目に太鼓場で太鼓打ちの棒打（ぼうだ）があり、天棚が壊され祭りが終わる。

豪快な祭りである。

d 「加茂神社例大祭」

町の東に位置する加茂神社は、落雷・雹・嵐などの災害を避ける為の雷神信仰と、境内の湧き水による雨乞い信仰として古くから参拝が行われている。

祭りの日には各地から巨大な梵天が奉納される。

e 「いかんべ祭り」

いかんべとは、南那須地方の方言で“いいだろう”という意味である。現在この祭りは町の一大イベントとなりつつある。しかし、この祭りの歴史については、正確には解らない。この祭りは神を祀るというのではなく、人々の楽しみとしてのものである。

6) 民話

里山は民話の宝庫でもある。昔より書き残されたり語り継がれたお話をもととして“民話”が創作されてきた。

次の三つの民話は、福田絵梨香さんによって作られたものである。

阿吽苦離地藏

昔々、八々代というところに阿吽苦離地藏というお地藏様が祀られておりました。

様々な苦しみから救ってくださるということから、村人たちは、毎日手を合わせて、今日一日の平和を願っていました。

ある晩のこと、一人の母親が高熱を出した子供を

抱えて山道を走っていました。

ここから医者まで行くのには山を越えていかねば
なりません。しかし、どんなに頑張っても
朝になってしまうほどの長い道のりです。

母親は、足を引きつりながらも走り続けましたが、
疲れて倒れてしまいました。

そのとき、目の前に阿吽苦離地蔵がいらっしゃるのが
見えて、母親は、すぎる思いで泣きつきました。

供える物が何もないので、自分の頭に巻きつけてあった
手ぬぐいをお地蔵様にかぶせ

「どうか、この子を助けてください」

と、一晩中祈り続けました。

どのくらい祈り続けたことでしょう。突然の赤ん坊の声で
母親が気づきました。

よく見ると、赤ん坊は熱も下がって元気いっぱいに泣いています。
母親は、阿吽苦離地蔵に何度も何度もお礼を言いました。

それからというもの、病を持った子供の親が、

阿吽苦離地蔵を訪ねてくるようになり、

そのうちに、子供の病を治す、その名も

「子育て地蔵」と呼ばれるようになりました。

細 野 英 夫

黒みだ様

昔、三箇の戸田というところで、
村人たちがいつものように荒川で
魚を取っていました。

村人の一人がふと遠くに目をやると
光輝くものを見つけました。
それは川の流れに沿ってどんどん
こちらへ近づいてきます。

よく見ると、
それは金色のあみだ様でありました。
村人たちは近くにある真塔院という
お寺に連れて行きました。

このあみだ様があまりにも美しく輝いて
いるので、この世のものとは思えずに、
黄泉の国のあみだ様なのだと考えました。
そして、死んだあとに誰もが極楽浄土で
穏やかな暮らしができるということを念じて
お堂を建て、念仏を唱えて大切に敬いました。

ところがある日の早朝、
お寺のわき道を、馬を引いた村人が通りかかったとき、
朝日に輝くあみだ様に目がくらんだのか、
馬は驚いて、すぐ下を流れる荒川に落ちてしまいました。
恐れをなした村人たちは、目をくらますことのないように、
このあみだ様を漆で黒く塗ってしまいました。

それからは目をくらまされた人はいませんが、
今も黄泉の国をつなぐとされるあみだ様は
黒く染められたまま大切に祀られています。
黒く塗ったせいか盗人にも手をかけられることなく、
村人からは、
「黒みだ様」と呼ばれ、親しく穏やかに過ごしています。

弁才天

その年。嵐が来ては家々が吹き飛ばされ、
雨が降れば農作物が流される。
山火事も絶えず起こり、村人は
「神様のお怒りじゃ。弁才天様が怒ってらっしゃる。」
と、ささやきあっていました。

弁才天は村の守り神として、昔から村の真ん中に
祀られていたもので、そのときから村人は安定した
生活を送れるようになりました。
しかし近頃は、朝の参拝に来る村人も減り、
弁才天が祀られている神社の周りも草が生い茂って
いたのです。

領主の大田原増清は、弁才天を移動させ、舞を披露
しました。笛の音に合わせて優雅な獅子舞が登場し、
つづいて木彫りの面をつけた、おかめとひょっとこ
の舞。
あまりのおかしさに村人たちからも笑いが起こると、

細 野 英 夫

どこからともなく明るい声が聞こえてきました。

聞いたこともない不思議な声でした。

見れば弁才天の目元が下がって愛らしいお顔になって、

温かいお顔になっていました。

すると長老は言いました。

「そうだ、そうだ。弁才天様のお顔は、こんな顔を
しておられた。長い間放っておいたから、いつの間にか
お顔が曇ってしまわれたのじゃな」
それから、弁才天は今でも大切に祀られています。

おわりに “里山” その景観を文化財に

2004年1月8日文化庁は、05年度の施行を目指して、今通常国会に文化財保護法の改正案を提出する旨の発表をした。棚田や里山の景観や、鍛冶や除雪用具作りなど、暮らしの中で継承されてきた民族技術を、新たに文化財として指定できるようにしようとするものである。既存の文化財の概念ではとらえきれないが、消滅の危機にあり保護が必要との考えからである。

改定案では文化財の六つ目の分野として「文化的景観」を新設、民族技術は民族文化財に追加するというものである。

このうち「文化的景観」としての里山や棚田を「日本の原風景ともいふべきもの」としてとらえ、りんごやブドウの畑、牧場、防砂林やハゼ並木、防波堤や養殖いかだ等全国180カ所を重要地域として、00年からの調査をもとにリストアップしているという。

里山は里地里山とも呼ばれ、農山村の人家の周辺の人の手が加わった田畑や森林を指す言葉として使われている。そこには雑木林や竹林が生い茂り、流れる小川にはメダカやフナが泳ぎ、ミズスマシ・ゲンゴロウやホタルが生息していた。子ども達はそれを採り、遊び楽しんでいた。豊かな自

然の宝庫であり、美しい田園風景があった。そこに生きる人間もまた生き生きとしていた。自然と人間の共生の場であったのである。

「新・生物多様性国家戦略」(環境省 2003年)「私たちは何をすべきか」7つの提案の一つの中で里地里山の保全について“奥山地域と都市地域の間”に広がる里地里山は、国土の4割を占める。水路やため池、里山林や田畑など、人間と自然のかかわりが作り出した変化に富んだ自然環境をもつ里地里山は、絶滅危惧種の5割が生息できる生物多様性のうえで重要な地域である。

里地里山は、農業など生産や生活と深くかかわって成立しているの、地域住民やNPOも参加した里山再生事業の実施、里山管理協定制度の推進など、地域の実情に応じたきめ細かい対策を強化する”とし、その保全は人間生活の安定性・安全性を保障する為に必要であると述べている。

地域社会活性化の成功の鍵は、その地域の固有財産である多様な生物や文化を保全し、育成することであるといえよう。なぜならば、地域によって生物多様性が異なれば、これに根ざした文化も異なるからである。

都市の巨大化した現代では、人々の“緑”への要望は増大している。里山のもつ効用としてどのようなものが考えられるだろうか。第一に水源の涵養・洪水防止・土砂の保全・高温化する都市気温の調整・酸素の発生、二酸化炭素の吸収など多様な環境保全機能を持つ。第二に自然観察や昆虫採集などの自然教育、環境教育の場。子供の遊び場として家族や地域社会の人々の団欒・ピクニックやキャンプなどのレクリエーションや自然探勝の場である。その他民話や童話の舞台となるなど、多くの有効性をもっている。

自然活動の中で育まれている心身の健康や連帯感、想像性・創造性のある個性豊かな人格形成、世界的な規模での環境問題へ適切に対応できる人づくりなどこの改定案の提案の意義は計り知れない。

引用文献

- (1) 栃木県博物館紀要 2000
- (2) 生物環境論 細野英夫 学文社 1995
- (3) 栃木県南那須町北西部の植物相 八坂美智夫・小倉洋志 県博物館紀要1992
- (4) 里山の自然をまもる 石井実 築地書館 2000
- (5) 南那須町の文化財 南那須町教育委員会 1994

参考文献

- 1 里山の自然 田端英雄 保育社 1998
- 2 里山の自然をまもる 石井実 築地書館 2000
- 3 里山 I I 有岡利幸 法政大学出版局 2004
- 4 栃木県南那須町北西部の植物相 八坂美智夫・小倉洋志 県博物館紀要 1992
- 5 南那須町 希少樹木調査報告書 南那須町教育委員会 1995
- 6 南那須町の文化財 南那須町教育委員会 1994
- 7 里山は自然の宝庫 八坂美智夫 大日本図書 1998
- 8 里山の生態系 広木昭三編 名古屋大学出版会 2002
- 9 日本の里山 今森光彦 平凡社 2000
- 10 新生物多様性国家戦略 環境省 2003
- 11 景観スケールを重視した環境プログラムの開発 平吹喜彦 宮城教育大学
- 12 丘陵地二次林の植物調査とパーソナルコンピュータを用いた群落区分 平吹喜彦 宮城教育大学
- 13 みつけよう、みつめよう、青葉山の自然 平吹喜彦・川村寿郎 宮城教育大学
- 14 栃木県博物館紀要 2000

(本学経営学部教授)